『冬の夜またぐボンファイア』

黒田侑馬

【登場人物】

勝山アキ（22）……彼氏

菱野サトネ（22）……彼女

○アパート・一室(冬・夜)

アパートは京都のどこかにある。
サトネ(22)はコタツに入って寝そべっている。
一方で、アキ(22)は窓の縁に頬杖を突き、外を眺めている。
時計は19時過ぎを差しており、二人は退屈そうにしている。
サトネ「……なあ、ウチら付き合ってから何年やろ？」
アキ「えぇ……何年、何年……3年ぐらいやない？」
サトネ「そ……」
しばらくの沈黙。
サトネ「なぁ、アキ……アキ？　聞いとるんか？」
アキ、返事もしないで窓の外に目を凝らしている。
サトネ「人が大事な話しよう思てんのに――」
アキ「待った、なんやアレ？」
アキ、窓から少し身を乗り出して、外を見る。左手でサトネに「来て」のジェスチャーをする。
アキ「ちょっと来てみ――ほら、アレ」
サトネは気だるそうにしながらもコタツから出てきて、アキのもとへ行く。
アキが窓の外を指し示す。
その先には、山の中腹付近で何かが白く光っていた。
アキ「なんなんやろ、初めて見たわ。サト、お前アレがなんか知っとる？」
サトネ「知るわけないやろ、どうせあれちゃう？　ゴルフ場のナイターの光。この前ちょっとしたニュースになっとったし、それちゃうか？」
アキ「でも、あんなとこにゴルフ場なんかあったか？　――俺が見るに、あれは五山の送り火や」
サトネ「はぁ？　暖房で頭とろけたんか？　五山の送り火はお盆の行事やんか」
アキ「だから冬バージョンや」
サトネ「くっだらないなぁ、もう寝る」
サトネは呆れて、コタツに戻ろうとする。
すると、アキが「わっ」と声を上げ、アパートを飛び出す。

○同・表の道路(冬・夜)

アキは光る物体を探すため、遠くを見回している。
後から追いかけてくるサトネ。
サトネ「あー寒っむいなぁ。どうしたんや、急に」

アキ「いや、さっきの光るやつがな、急にオレンジ色になって飛んでったんや」
サトネ「んなバカな、なんかの見間違いちゃうか？」
アキ「いやホントに見たんよ。ほら、その証拠にさっきの山見てみ」
　　アキ、光る物体があった山を指し示す。
サトネ「ホンマや、曼荼羅山にあったのに――あっ、あれ見て！」
　　サトネは左大文字山のほうを指し示す。
アキ「あった、あの光や！」
サトネ「確かにオレンジ色やな」
アキ「――俺、ちょっとあれがなんなのか見てくるわ」
サトネ「何言うてんの？　わざわざ寒い中、こんな時間に行かんくてもええのに」
アキ「あんなん見たら気にならんわけない。光って高速で飛ぶものなんてＵＦＯしかない　やろ？」
サトネ「せやけど……」
アキ「別にサトはついて来んくてええで、一目見て帰ってくるだけやし」
サトネ「あっそ、好きにすれば」

○同・駐輪場（冬・夜）

　　アキは、原付に乗り出発しようとする。
　　そこにサトネがやってくる。
サトネ「待って！　やっぱりウチも行く」
アキ「おう、じゃあ後ろに乗りぃ」

○道路（冬・夜）

　　原付に二人乗りして、左大文字山に向かっている。
アキ「もうそろそろや」
サトネ「ホンマにＵＦＯなんかなぁ」
アキ「それは着いてからのお楽しみや。しかし、何でやろ、俺ら以外誰も山に行こうと　する気配がない」
サトネ「まぁ確かにあんな目立つもんがある割には人がおらんな……いうても今日は　――」
二人「うわぁっ！」
　　突如、光る物体が左大文字山から上昇する。さらにオレンジ色から黄　緑色に変色し、勢いよく南東へ飛翔した。
アキ「見たか、今の」

サトネ「うん……黄緑色になって、飛んでった」
アキ「どこに飛んでったか分かるか？」
サトネ「二条の方に向かった！」
アキ「ナイス、サト！」
アキ、右手の拳をサトネに向ける。
サトネ、アキの拳に自身の拳を軽く小突く。

○ビル街・道路（冬・夜）

二人は原付を走らせたまま、周辺で光る物体の行方を追っている。
アキ「この辺りなんやろ？　アレが飛んでったのは」
サトネ「うーん、ここらへんなんやけどなぁ。でも、あんなに光ってたら誰か気づく思うけどなぁ――あ！　アキ、止まって！」
アキ「見つけたか！？」

× × ×

二人は原付から降りて、路地裏の入り口に立っている。
サトネは、路地裏の奥の方を指さしている。
サトネ「ほら、あれ」
アキ「ホンマや、なんか光ってるわ。とうとう見つけたで、覚悟しとき」
アキは路地裏へ入っていく。

○路地裏（冬・夜）

二人はなんとか路地裏を進んでいく。
光る物体との距離は十五メートルほど。
アキたちは固唾を飲んで、光る物体に近づいていく。
すると、光る物体は黄緑色から青色に変わり、真上に上昇した後、どこかに飛んでいく。
アキ「うわぁぁぁ、また逃してもうた！」
サトネ「えぇ、またぁ？　――と、うわぁぁぁ」
サトネがつまづき、アキを背中から押し倒す形で転ぶ。二人は路地裏の空き地に出る。

○路地裏の空き地（冬・夜）

二人は転んだ姿勢から立ち上がる。

空き地は木で囲まれている。
サトネ「いたた……あ、ごめんアキ！」
アキ「あぁ、ええで……それより、なんやここ、ビルの間とは思えんな」
二人は空き地を見回す。
アキは光る物体があった場所の付近に注目する。
アキ「あの光るやつ、何も落とさんかったな」
サトネは周囲の樹を見て回る。
サトネ「あ！　ここ、もしかして秘密基地があった場所ちゃう？」
アキ「ここがか？　そんなわけあらへんやろ。だって、秘密基地は公園の茂みの奥で……」
サトネ「じゃあこれ見てみ、アキ」
サトネ、樹を指さして、
サトネ「このでっかい樹のうろ、ウチらが秘密の手紙言うて、こん中に入れとったやんか」
サトネ、次は枝の根元が折れた痕を指さして、
サトネ「ほら、これも。あぁ、懐かしいなぁ。これ、アキとみっちゃんがハンモックぶら下げて、二人で乗ったせいで折れた樹やろ？」
アキ「言われてみれば、確かに昔の秘密基地や！　でも、なんでこないなトコに？」
サトネ「そりゃ、公園があった場所にビルが建ってもうた。それだけやろ」
アキ「そうか、そうやな……」
サトネ「あ、それよりあの光るのはどうするん？」
アキ「そうやった！　すぐ追いかけよう」
サトネ「はぁ、見つかるんやろか」

○高台（冬・夜）

二人は高台から街を見下ろして、光る物体を探している。
サトネ「あ！　あそこ！」
サトネ、高校に指をさす。
アキ「あぁ、ホンマや。よう見つけるなぁ、街全体が光っとるからもう見つからんと思うたわ――てか、あそこって――」
サトネ「さすがに分かるよな、ウチらが通うとった花校や」

○花口高校・正門（冬・夜）

二人は閉ざされた校門の前に立っている。
アキ「来たんはええけど、どうしよか。こんな時間、先生もおるわけないやろし。なぁサト、どうしよか」

サトネ「……」
アキ「どうしたんや？　気分でも悪うしたか？」
サトネ「ちゃう、アキは変わってもうたんやなって」
アキ「いや、いきなり何の話や」
サトネ「アキは昔はこんなんやなかったやろ！『学校は閉まっててなんぼ』みたいなヤツやったやんか！」
アキ「……まぁ、昔は確かに好き勝手しおったわ。でもそれは昔の話やろ？　二十歳超えたいい大人がそないなことしていいわけない」
サトネ「……」
　サトネ、黙ったまま校門をジャンプしてくぐる。
アキ「おいサト！」
サトネ「ウチは行くで。アンタは？」
アキ「……もうあんなん追いかけんくてええやろ？　こんなことしてまで見つけたいもんでもない」
サトネ「何、弱気になっとんや」
　サトネ、格子の隙間から手を差し出す。
サトネ「はよ決め。ぐずぐずしとると、あの光るの行っちまうで」
　アキ、少し逡巡してから決意を固める。そして、サトネの手を握る。
アキ「……サトは変わんないなぁ」
サトネ「なんや？　悪口か？」
アキ「ちゃうわ、誉め言葉や」
サトネ「……うっさいわ！　はよ上らんかい！」
　アキ、手を放す。
　サトネ、一瞬不安そうにする。
　アキ、校門をジャンプしてくぐる。
　途端、赤く光る物体が屋上から飛び去る。
　二人、見上げる。
サトネ「ありゃ、また逃げられてもうた」
アキ「なんか、あの光るやつ、ムカついてきたわ」

○「道路」までのダイジェスト（冬・夜）

　二人は原付に乗って、光る物体を追いかけている。
　商店街の前
アキ「うわ、ここの肉屋潰れてもうたんか。コロッケ、安くてうまかったのになぁ」
　河原・橋の上

雪がぱらぱらと降ってくる。
サトネ「雪が降ってきたなぁ」
アキ「寒ないか？」
サトネ「うん、大丈夫やわ」
ラブホテルの前
二人、気まずそうにする。

○道路（冬・夜・雪）

二人は原付に乗って、光る物体を追いかけている。
サトネ、アキの背中を見る。
サトネM「思えばアキは昔っからこうやった。面白そうなものがあるたびに一人で暴走して勝手に満足して……もしかしたら、アキの人生には恋愛なんてものは要らないのかも知らへん。でも、ウチは彼のそんなところが好きやった。アキが楽しそうにするところを見てるだけで良かったんや」
サトネ、アキの背中に寄り添う。
アキ、軽くサトネのほうに振り向いて、すぐに前を見る。
アキ「そういや、あの光の色が変わるのは何か法則があるんやろうか」
サトネ「……さあ、分からへんなぁ」
原付の進行方向で、光る物体が空に浮上し、奥へと飛んでいく。光る物体は急停止し赤色から黄色へと変わる。輝きが増す。
サトネ「うわっ、すごいきれいや……」
光る物体が真下へ落下する。
アキ「ようし、今度こそ見つけたる」
原付、交差点で右折する。

○イルミネーションスポット（冬・夜・雪）

二人は原付を下りて、光る物体が落下した場所までくる。
サトネ「落下した場所ってもしかして」
アキ「ああ、ここだな」
二人の目に、イルミネーションが映る。
クリスマスっぽい音楽が流れている。
二人、互いに見つめ合い、笑う。
ひとしきり笑い、静かになる。
アキ「ケーキでも買って帰るか」

サトネ「ああ、せやな」

雪の中、二人は手を繋いでイルミネーションスポットの中へと歩いていく。

了